

連載

Turbo HAMLOGの 部屋

Turbo HAMLOG開発者

JG1MOU 浜田 博 Hiroshi Hamada

第17回

HAMLOGのデータの保守について

今回は、Turbo HAMLOG/Win (以下、HAMLOGと略します) の[オプション(O)]メニューの中にある[データの保守(D)]メニューについてご紹介します。

データの保守(D)メニューから

図1は、HAMLOGの[オプション(O)]メニューの中にある[データの保守(D)]メニューを開いた状況です。サブメニューとなっています。

いちばん上の[データのインポート(I)]については、本誌2025年5月号と6月号でご紹介しましたので割愛します。

以下、[データの保守(D)]メニューを上から順に解説します。

文字列の置換(P)

図2は、文字列の一括置換ウィンドウを表示させた状況です。

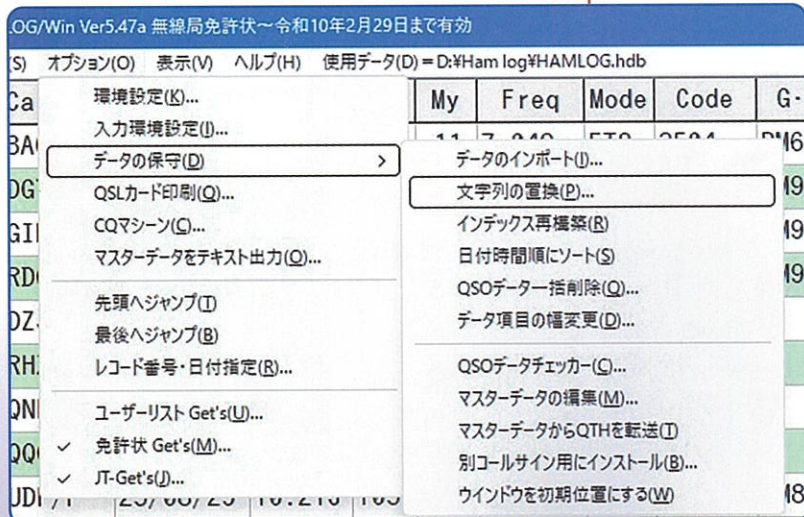
この機能では、各入力項目のうち、Freq, Mode, G・L, QSL, Name, QTH, Remarks1, Remarks2の対象文字列を検索し、置換文字列を書き込みます。

筆者の場合は、モードや移動運用場所をうっかり間違った状態のままたくさん交信してしまったと

き、帰宅後に一括して修正する、という使い方をしています。念のため、実行する前にバックアップを取っておくと良いでしょう。

図2の例では、Remarks1に自局移動地として登録した"群馬県草津温泉"という文字列を検索し、"群馬県吾妻

図1 [オプション]メニューの中にある[データの保守]メニュー。サブメニューとなっている



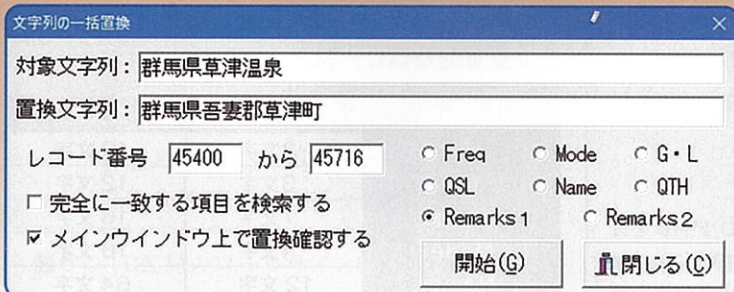


図2 文字列の一括置換ウィンドウ。指定した項目から対象文字列を検索して置き換える

郡草津町"に書き換えます。

レコード番号で置き換える範囲を指定し、[開始 (G)] ボタンをクリックすると始まります。

完全に一致する項目を検索する

ここにレ点を入れておくと指定した項目全体が完全に一致するデータを検索し、置換文字列を書き込みます。

例えば、Modeを一括して置換する場合、対象文字列にPSKを指定しても、PSK31は検索されません。

ここにレ点が入っていない場合は、部分一致で検索しますので、例えばFMを指定するとC4FMも検索されます。

メインウィンドウ上で置換確認する

ここにレ点を入れておくと、置き換え前に1データずつ確認のメッセージが表示されます。

図3は、Remarks1にある"茨城県桜川市"を"茨城県石岡市"に置き換えている状況です。1件ずつ確認のメッセージが表示されます。

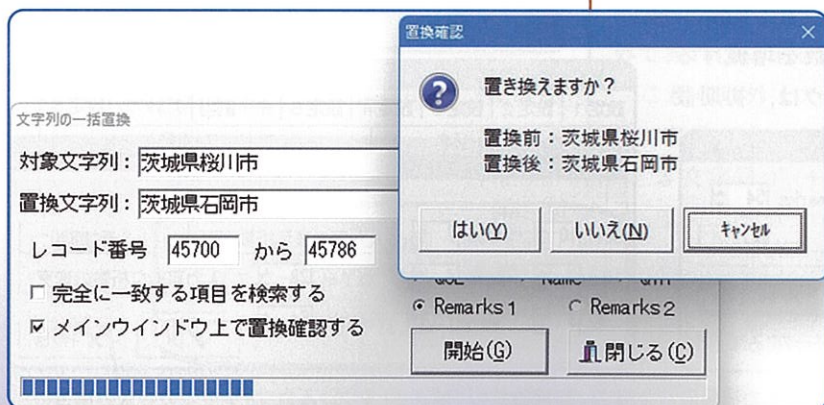


図3 文字列を置き換えるときの確認メッセージ

空欄の項目に一括して文字を書き込みたい場合

対象文字列欄に¥¥¥¥ (半角の円マークを4個)を入れた場合、空欄の項目を検索し、置換文字列を書き込みます。

図2の場合で対象文字列の欄に¥¥¥¥を入れて実行すると、Remarks1が空欄のデータを検索し、"群馬県吾妻郡草津町"を書き込みます。

インデックス再構築 (R)

インデックスとは、書籍の「目次」や「索引」の意味と同じようなもので、例えばコールサインで検索するとき、インデックスファイルから該当コールサインがQSOデータのどの位置に存在するのを探しています。

これにより、数十万件の交信データから瞬時に検索できます。

この操作により、インデックスファイル (HAM LOG.DX0 ~ HAMLOG.DX4) の計5個を作り直します。

通常は、ファイルのタイムスタンプを比較して自動的にインデックス再構築が行われますので、使うことは少ない機能です。

日付時間順にソート (S)

順番を前後してQSOデータを入力した場合、ここで日付時間順に並び替えることができます。

手書きのログ帳から転記した場合や、筆者の場合ではFT8で交信データの登録漏れがあって追加したときに活用しています。

図4のように、ソート（並び替え）したい範囲をレコード番号で指定します。レコード番号の範囲の初期値は全交信データですが、必要な部分だけを指定することができます。

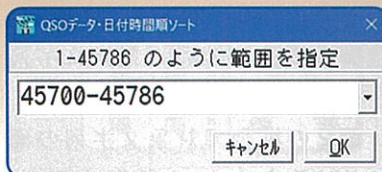


図4
QSOデータを日付時間順に並べ替えるときの範囲指定の状況

QSOデータ一括削除 (Q)

QSOデータのレコード番号を範囲指定し、一括して削除します。

図5の例では、レコード番号45,700番から45,786番までを削除します。初期値としては、最終の番号がセットされます。

途中のレコード番号を指定して削除すると、その後のレコード番号がズレます。

なお、QSOデータを個別に確認しながら削除したい場合は、[データの表示&修正]ウィンドウの右クリックメニューから実施できます。

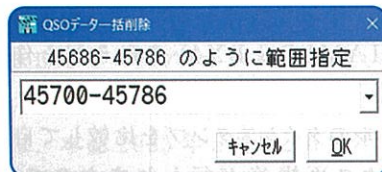


図5
QSOデータを一括して削除するときの削除範囲の指定状況

データ項目の幅変更 (D)

QSOデータとして入力する項目のうち、His、My、Freq、Mode、Name、QTH、Remarks1、Remarks2の入力可能な文字数を増減することができます。図6のウィンドウは、初期設

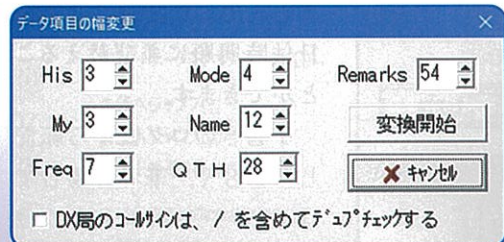


図6 データ項目の幅変更ウィンドウ。各入力項目の入力文字数の上限を変更することができる

定の数値であって最小値です。

変更可能な幅は、次の表のとおりです。

入力項目	初期値 (最小)	最大値
His	3文字	12文字
My	3文字	12文字
Freq	7文字	16文字
Mode	4文字	16文字
Name	12文字	64文字
QTH	28文字	128文字
Remarks 1	54文字	254文字
Remarks 2	54文字	254文字

※ 半角で入力する場合の文字数です。

例えば、Remarks1とRemarks2は、それぞれ54文字までですが、これを100文字まで入力できるように増やしたい場合は、図6のRemarks欄を100にセットして[変換開始]ボタンをクリックします。変換終了後、HAMLOGはいったん終了します。

変換前のQSOデータであるHAMLOG.HDBファイルは、HAMLOG.\$DBにリネームされています。

入力ウィンドウ上に表示できる文字数を増やす

図6では入力可能な文字数を変更することができますが、入力ウィンドウや[データの表示&修正]ウィンドウで表示される文字数には変更が及びません。

図7は、環境設定の[設定6]タブです。ここで数値を変更し、[入力欄の表示桁数変更]ボタンをクリックすることにより、表示される文字数を増やすことができます。

また、図7、環境設定の[設定6]タブの、[入力

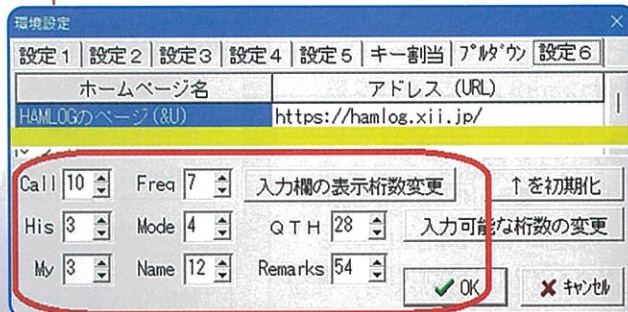


図7 環境設定の[設定6]タブ。入力ウィンドウの各入力項目の表示文字数を変更することができる

可能な桁数の変更」ボタンをクリックしても図6の「データ項目の幅変更」ウィンドウを起動することができます。

DX局のコールサインは、 /を含めてデブチェックする

図6の「DX局のコールサインは、/を含めてデブチェックする」にレ点が入っている場合と、レ点が入っていない場合ではHAMLOGの動作が異なります。

レ点が入っていない場合（お勧め）

例えば、入力ウィンドウでコールサインをAA1BBと入力したとき、過去にAA1BB/KH6・VP9/AA1BB・AA1BB/6・AA1BB/DU7と交信していた場合、これらはすべてAA1BBというコールサインで検索され、5回目のQSOとなります。

過去4回の交信のQTH欄には、それぞれHawaii・Bermuda・United States・Philippinesと入力されています。

レ点が入っている場合

前述の場合、過去4回の交信のQTH欄には、それぞれHawaii・Bermuda・United States・Philippinesと入力されていますが、AA1BB/KH6・VP9/AA1BB・AA1BB/6・AA1BB/DU7との交信は、別々のコールサインとして扱われます。

したがって、入力ウィンドウでAA1BBとコールサインを入力すると、1st-QSOとなります。

QSOデータチェッカー（C）

QSOデータ中の変なデータを探し出し、メモ帳な

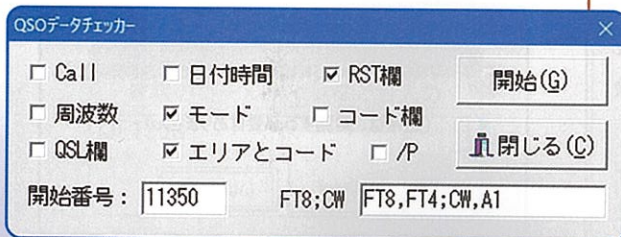


図8 QSOデータチェッカーのウィンドウ。QSOデータ中の入力ミスを探することができる

どでその結果を表示します。

たまにこの機能を実行すると、明らかな入力ミスを発見することができます。必ずしも間違いではない場合がありますので、参考程度にしてください。

QSOデータチェックの結果は、QSOデータと同じフォルダに"QsoError.txt"というファイルに保存され、メモ帳やエディタで表示されます。

図8は、QSOデータチェッカーのウィンドウです。

データチェックする項目がそれぞれ選択できますので、個別に解説します。

「Call」にレ点を入れた場合

国内局との交信を対象に、コールサインの1文字目が7, 8, J以外であるデータや、コールサインの3文字目が数字ではないデータがあれば、メモ帳などでその結果を表示します。

「日付時間」にレ点を入れた場合

QSOデータが日付時間順に並んでいない部分や、ありえない日付・時間のデータがあれば結果を表示します。

「RST欄」にレ点を入れた場合

図8右下の「FT8;CW」の欄に入れたモードによりデータをチェックします。

図8右下には「FT8,FT4;CW,A1」と入力されていて、セミコロンの左側がFT8などのデジタルの場合、右側が電信の場合です。

FT8などの場合は、RST欄が+49～-39の範囲以外であるデータがあれば結果を表示します。

CW, A1の場合は、RST欄1文字目が3～5以外、2文字目が1～9以外、3文字目が5～9以外であれば結果を表示します。

これら以外（フォーンの場合）は、RST欄1文字目が3～5以外、2文字目が1～9以外、3文字目が+以外の文字があれば結果を表示します。

「周波数」にレ点を入れた場合

HAMLOGで認識できないバンドや周波数欄にカンマが入っているデータがあれば、結果を表示します。

[モード] にレ点を入れた場合

モードの1文字目が英字でないデータがあれば、結果を表示します。

[コード欄] にレ点を入れた場合

国内 QSO の場合は、QTH 欄とマスターデータの QTH で文字列を比較して全角で2文字以上異なるデータがあれば、結果を表示します。

また、マスターデータに存在しないコードや、コード欄に全角スペースが入っているデータがあれば結果を表示します。

[QSL 欄] にレ点を入れた場合

通常は QSL 欄1文字目には J (JARL 経由) や N (ノー QSL) など入れておきますが、この1文字目が空白のデータがあれば結果を表示します。

[エリアとコード] にレ点を入れた場合

コールサインのエリア番号、または移動地のエリア番号と、JCC/G コードの一致状況を調べます。

例えば、JG1MOU/2 で QTH が " 東京都〇〇市 " のようなデータがあれば結果を表示します。

[/P] にレ点を入れた場合

移動エリアが /P の局を抜き出し、その結果を表示します。

開始番号

ここで指定したレコード番号から最終データまでをチェックします。

マスターデータの編集 (M)

マスターデータ (HAMLOG.MST) に登録されている市郡区町村 DX を個別に追加、訂正、削除を行います。

また、表示 (V) メニューの [Wkd/Cfm マスターデータ集計] の処理により、交信した QTH はここに W と、QSL カードを受領した QTH は C と表示されますので、その訂正を行うこともできます。

図9のように市区町村コードを入力すると、存在しないコードであれば、追加処理となります。図10のように存在するコードであれば、マスターデータの修正処理となります。

マスターデータの修正を必要とする状況は少ないと思いますので、詳細はヘルプをご覧ください。

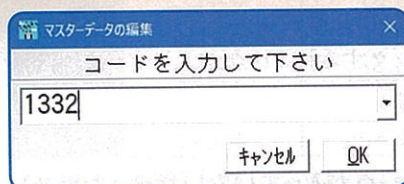


図9 マスターデータを編集する際の、JCC/JCG 番号や町村コードの入力

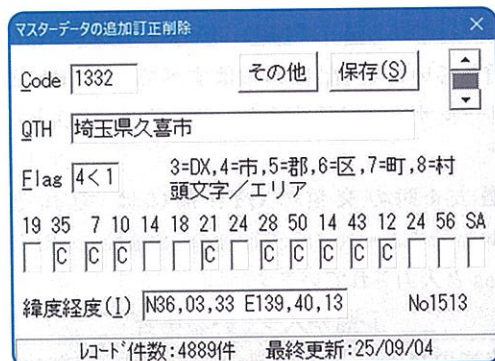


図10 マスターデータの追加訂正削除を行うウィンドウ

マスターデータから QTH を転送 (T)

マスターデータ (HAMLOG.MST) の QTH 情報を、QSO データの QTH 欄にコピーします。

図11は、メニューから本機能を実行しようとしたときの確認メッセージです。

QSO データに JCC/JCG 等のコードが入力されていて QTH が空白であれば、コードを利用してマスターデータから QSO データに該当する QTH 情報

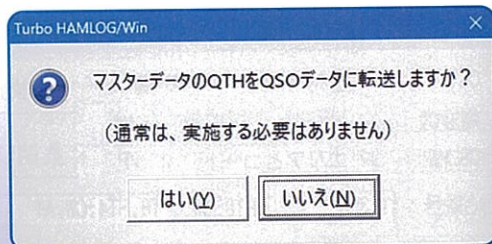


図11 マスターデータから QSO データに QTH を転送するときの確認メッセージ

をコピーします。

都道府県コードのみの場合は、都道府県名を転送します。

QTHに何らかの文字列が入っている場合は、何もしません。

この機能は、他のログソフトからHAMLOGにデータをコンバートした場合などを想定しています。

別コールサイン用に インストール (B)

すでにHAMLOGがインストールされているパソコンに、別のコールサイン用のHAMLOGをインストールしたい場合や、クラブ局のコールサインで使いたい場合など、同一パソコン上に別々の設定でHAMLOGを動作させたい場合があります。

図12は、メニューから本機能を実行しようとしたときの確認メッセージです。

図13では、仮に筆者が所属するJF1ZUGというコールサインを入力しました。

すでにインストールされているHAMLOGがCドライブだった場合、同じドライブのC:\¥JF1ZUGフォルダにHAMLOGがインストールされ、デスクトップ上にはJF1ZUGというHAMLOGのアイコンが作成されます。

別のフォルダにインストールされますので、まっ

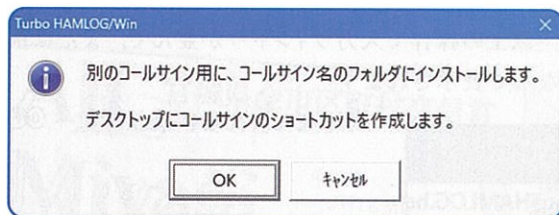


図12 別コールサイン用にインストールするときの確認メッセージ

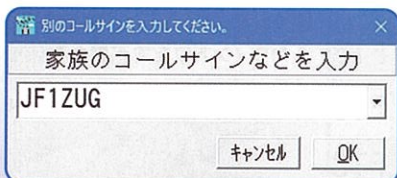


図13 同一のパソコンに別のコールサイン用のHAMLOGをインストールすることができる

たく別の設定で動作させることができます。

なお、元のHAMLOGからであれば何個でも別コールサイン用にインストールができますが、別コールサイン用のHAMLOGからさらに別のコールサイン用にHAMLOGをインストールすることはできません。

ウィンドウを初期位置にする (W)

パソコンに複数のディスプレイを接続してハムライフを楽しんでいる方が多いと思います。

しかし、HAMLOGの特定のウィンドウがスクリーンの範囲外に表示されていて操作できなくなることがあります。

マウス操作ができず、HAMLOGがフリーズしたように感じてしまいます。原因としては、

2台目ディスプレイの表示エリアにHAMLOGの一部を表示させていたが、2台目ディスプレイを廃止した。あるいは設定を変えた。

設定ファイル (INI ファイル) ごとディスプレイが小さいパソコンにコピーして使用した。

マウス操作でうっかりスクリーンの範囲外に移動させてしまった。・・・などが考えられます。

こうした場合に、この機能によって元に戻すことができます。

図14は、ニューから本機能を実行しようとしたときの確認メッセージです。

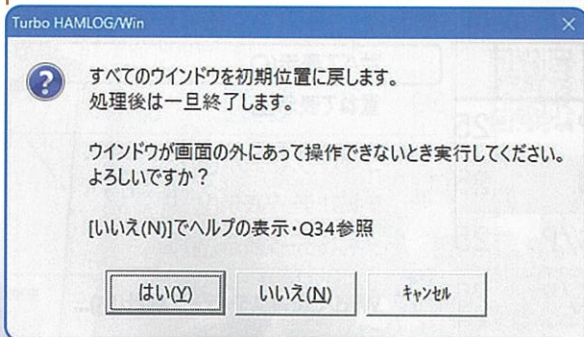


図14 HAMLOGの各ウィンドウの位置を初期状態に戻すときの確認のメッセージ

**[ウィンドウを初期位置にする(W)]は
最後の手段。
まずは、以下の方法がお勧めです**

[ウィンドウを初期位置にする]を実行した場合、すべてのウィンドウ位置を初期化しますので、ウィンドウの大きさや表示セル幅なども再設定する必要があります。

したがって、この機能を使うのは最後の手段です。

まずは、以下の方法で試してみてください。

**HAMLOGのメインウィンドウが
スクリーンの外に表示されていて
起動していないように見える場合**

タスクバーにHAMLOGのアイコンが表示されているが、スクリーン上には表示されていないためHAMLOGそのものが動作していないように感じる状況の場合です。

この場合、Ctrlキーを押しながらHAMLOGを起動させると、メインウィンドウが初期位置に表示されるようになります。これは簡単です。

**環境設定のような
他のウィンドウを操作できないウィンドウが
スクリーンの外に出てしまった場合**

1. 操作できない状態のまま、HAMLOGのメインウィンドウを一度クリックしてHAMLOGをアクティブにします。タスクバーからアクティブにすることもできます。

2. Altキーを押しながらスペースキーを押します。
3. 続いてMキーを押します。
4. 矢印キーをどれか1回押します。
5. マウスを動かすと、マウスに連動して隠れていたウィンドウが移動し、画面上に現れます。
6. マウスの左クリックで表示位置が確定します。

**入力ウィンドウなどの
他のウィンドウを操作できるウィンドウが
スクリーンの外に出てしまった場合**

そのウィンドウをあらためて表示させる操作をして、アクティブになったはずの状態にしてから上記の2番の操作から実行してください。

途中で間違えた場合は、最初からやり直してください。

以上の操作でも難しい場合は、図14(p.161)の操作で一括して初期位置に戻すしかありません。

**入力ウィンドウ LOG-[A]～LOG-[F]の
いずれかがスクリーンの外に出てしまって
表示されない場合**

この対処方法は簡単です。

まず、LOG-[A]～LOG-[F]のいずれか、表示されている入力ウィンドウを一度クリックしてアクティブにします。

図15のように、HAMLOGのメインウィンドウから[表示(V)]メニュー⇒[並べて表示(C)]または[重ねて表示(T)]を実行します。

以上の操作で入力ウィンドウが並んで、または重なって表示されます。

それでは、次号に続きます。◎◎

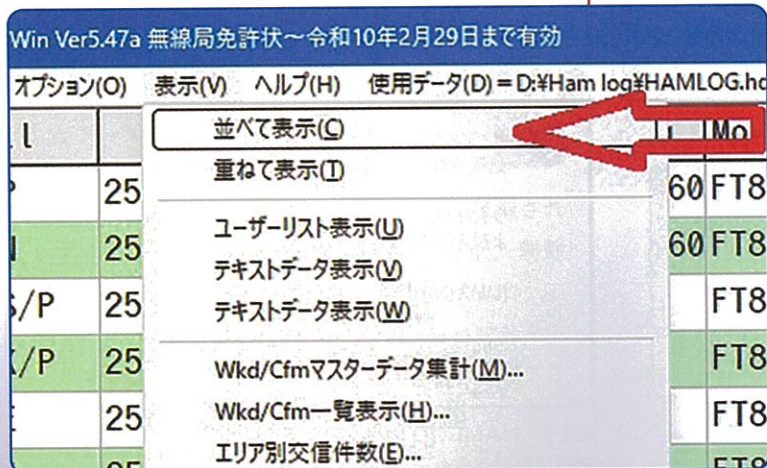


図15
入力ウィンドウを並べ替える
メニュー